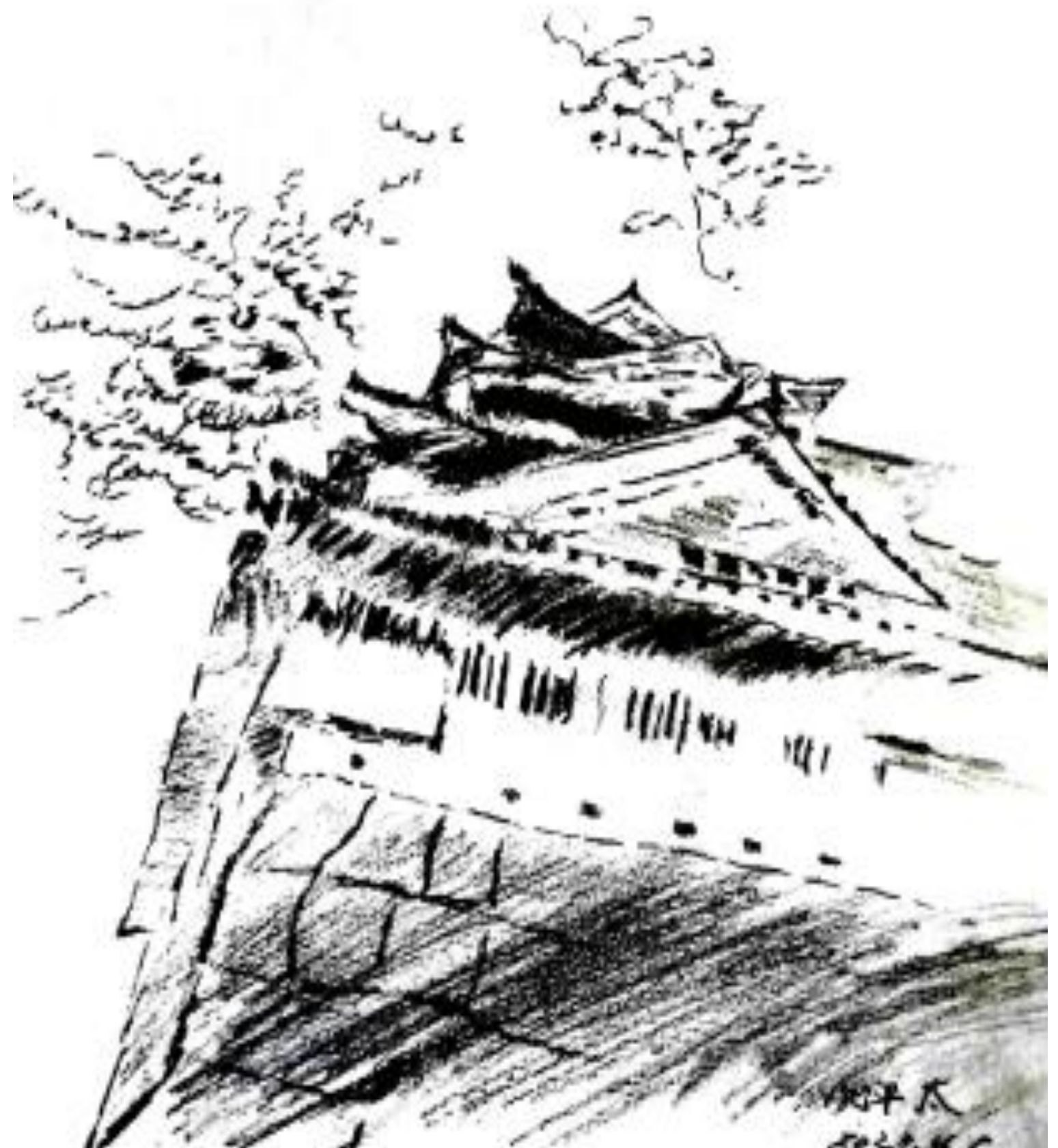


# 閣守天柳川

2025 年 9 月号



# 第28回例会 2025年8月15日(金) 投句締切分

## お題 「包帯」

小林満寿夫 選

包帯が取れてようやく夏が来る  
 包帯じゃとても直せぬ恋病  
 包帯の使用のうまさミイラかな  
 包帯はバンドエイドに取り代わり  
 ガザの民仮包帯も弾の中  
 包帯が取れぬアンタが噛んだ跡  
 理不尽にそっと包帯巻いておく  
 妹が包帯巻いて嬉しそう  
 突指に巻いてもらった保健室  
 包帯をあちこち巻いてする示談  
 包帯の下では濃霧注意報  
 心の傷愛の包帯貴方から  
 心には包帯出来ぬ傷が有る  
 心には包帯巻けぬ深い疵

### (五客)

佳5 包帯を巻いてサボった掃除役  
 佳4 指立てて包帯嬉し孫五歳  
 佳3 包帯が転んだ痣を黙らせる

浜脇蓬生  
 井澤壽峰  
 勘兵衛  
 青空  
 岩原一角  
 秋田あかり  
 直子  
 林ともこ  
 秋田あかり  
 春田敏晴  
 浜知子  
 堀内きみ子  
 勘兵衛  
 山野寿之  
 佐野正邦  
 青空  
 佐野正邦  
 佐野正邦

### (三才)

佳2 自己責任と知っているよ包帯も  
 佳1 ぐるぐる巻きの包帯外し整形美人  
 人 悪という悪に包帯しておこう  
 地 心にも包帯巻いて休養日  
 天 包帯を外すと空が晴れ渡る  
 軸 捨てもせず心の癒しにする包帯

信子  
 波部珀兎  
 船木しげ子  
 松谷由夏  
 浜知子  
 小林満寿夫

### (選評)

人の句  
 悪という悪に脱帽、目を塞ぐのではなく、静観も明るい未来への  
 展望を見据えていたい。負のもたらす財産として一時的には  
 仕方あるまい。

### 地の句

仕事や心の悩みは生きている限り解放されることはまずない。  
 でも忙中閑とすれば真っ白い包帯は心の支えとして、十分に  
 補えると解くべきだろう。ゆつくりと休めば心に十分栄養を  
 与えてくれるはずだ。

### 天の句

包帯が取れて気分爽快。こころ晴れ晴れ。単純ではあるが心情を  
 余すところなく表現している。明快である。さよならした包帯に  
 惜別の念はある？が、この別離は今後に必ずや生かされるはずだ。

# お題 「深い」

松谷由夏 選

埋めるには深すぎる溝パレスチナ

深い言葉父の思いに触れる今

赤子抱く浅い湯舟に深い愛

親と子は深い絆で結ばれる

失った深さを埋める星月夜

周波数深いところで響き合う

甘言に乗り深い闇はまりゆく

ひと声が生死を分ける人の情

深夜まで語り明かして得た本音

深刻に考え過ぎて五里霧中

心の傷深い情けに灯が灯る

## (五客)

佳5 深情け衰え知らね母の愛

佳4 水琴窟心身ともに浄化され

佳3 森は静寂千年杉は神の霊

浜脇蓬生

美代

真鍋心平太

東尾由子

林ともこ

直子

美代

秋田あかり

久世高鷲

堀内きみ子

堀内きみ子

井澤壽峰

松島きよみ

浜知子

## (三才)

佳2 深々と頭を下げて舌を出す

佳1 深追いはよそう残り火燃えてくる

林ともこ

浜知子

人 不細工な嘘だが深い愛がある

船木しげ子

地 黄泉にまで持っていきます深い縁

久世高鷲

天 フェルメール深い青色吸い込まれ

佐野正邦

軸 意味深な黄色い薔薇の贈り物

松谷由夏

## (選評)

### 人の句

相手を傷つけないように、つく嘘。

不器用で不細工な嘘。

そんな嘘には愛が詰まっているんでしょうね。

### 地の句

人には言えず黄泉にまで持っていく縁、誰にでもあるものでは無いですが、そんな秘密の縁って素敵な男女の想い出でしょうか？□マンティックなお話ですね。

### 天の句

「深い」という題でフェルメールの青に目をつけられた所に感心しました。

全部の句を一読した後にも心に残る句でした。

フェルメールの青は、とても印象に残る色です。

## お題 「雑詠」

真鍋心平太 選

断捨離魔娘が来ます月一度

深い傷直してくれた友の顔

石破君お盆乗り切りうまいなあ

テレビでは国の行方もエンタメに

大事な二人遠距離介護母と姑

慟哭のメガネ原爆資料館

子も孫も住む気がないとゴミ屋敷

距離感が上手になった暑い夏

快晴の夏の病窓から希望

さよならの夜景二人はそれっ切り

料理教室のレシピにある理想

昭和という芯があるから生き延びる

道に群れるミミズの昼はカラカラに

指くわえ見てる国連ガザの餓死

未来見た無謀では無い抱き夢

### (五客)

佳5 怠けると直ちに老いが迫り来る

佳4 フライパンで裏切り者を焼いている

佳3 放送禁止用語で蝉が鳴く猛暑

佳2 出会いまでページを戻す夏の朝

佐野正邦

東尾由子

岩原一角

浜脇蓬生

松島きよみ

井澤壽峰

林ともこ

直子

武智三成

久世高鷺

信子

浜知子

蔵内歳重

加山勝久

蟹座千支羊

堀内きみ子

船木しげ子

小林満寿夫

秋田あかり

佳1 キリン見上げ無い物ねだり亀の首

松谷由夏

### (三才)

人 天空の星眺むれば無の心

勘兵衛

地 一本の藁を掴んで巻き返す

山野寿之

天 2歳児の興味ニシヤツ裏の予備ボタン

波部珀兎

軸 折鶴の紙弾送るウクライナ

真鍋心平太

### (選評)

人の句

子供のころ夜上を向くと満天の星があり、その美しさに無心で見とれた。今はもうどこにもそんな空は無い。もう一度あの空と無心の心を取り戻したいと思った。

地の句

ささやかなことにも人生を支えるという真実があることを詠まれた句。高齢の私達にもまだチャンスはあるぞと背中を押されているようにも感じられ身体が熱くなった。また報われることの少ない氷河期世代の方達への応援歌とも読め、懐の深い句だ。

天の句

2歳児の子どもの成長のワンシーンを切り取ったアルバム一枚のような句。日常の中で気にも留めない存在が、子どもの目には宝物のように映る。

——その視点の新鮮さが、句に大きな魅力を与えていると同時に読む者に「ああ、そういう時期があったな」という懐かしさや温かさを感じ起こす一句だ。

# お題 「遊び」

互 選

1点

遊ぶ金欲しさ転落闇バイト  
 晩酌が遊びましょと来る夕べ  
 初乗りで4県廻る達成感  
 遊びなら許す真剣でも許す  
 命がけ歩きスマホでするゲーム  
 いつの日か遊び心に燃え尽きる  
 麻雀にハマり揃った四人衆  
 あの方は女遊びで当選し  
 老いて尚楽しく遊んでバイバイ  
 もう喜寿か遊んできたなこれから  
 夜遊びは程々にして柿の葉寿司  
 パビリオンへ並ぶ時間も楽しもう  
 遊びたい大人もみんな過去子供  
 歓声の鮑爆発踊り焼き  
 影法師捨てて月面鬼ごっこ  
 塾通い路地遊びする子もまばら  
 亡母に逢えそうジャングルジムのてっぺんで  
 スケボーの悪童取得金メダル  
 電車ごっこ父の背中が終点で  
 ままごとの味噌汁甘い初恋日  
 遊びたい心葛藤二浪中  
 とことんを遊び倒した春団治

松谷由夏  
 浜脇蓬生  
 三枝なな  
 井澤壽峰  
 浜脇蓬生  
 東尾由子  
 松谷由夏  
 岩原一角  
 堀内きみ子  
 佐野正邦  
 小林満寿夫  
 信子  
 蟹座千支羊  
 青空  
 真鍋心平太  
 加山勝久  
 浜知子  
 蔵内歳重  
 春田敏晴  
 春田敏晴  
 久世高鷲  
 山野寿之

3点

4点

5点

6点

7点

8点

9点

10点

得点があるものをすべて点数順に掲載しています。  
 得点が空白のものは前行の句と同得点です。

無し  
 出来るなら遊んで暮らす夢を見る  
 遊び過ぎた夏の終わりを告げる蜩  
 散々に遊んで可愛い子の寝顔  
 余生とや私を遊ぶ一行詩  
 遊びにも遊びはあると豪語する  
 公園の遊具危険な熱さです  
 遊びごと楽しく生きる常備薬  
 名目は脳トレ遊ぶスケジュール  
 火遊びは怖い夢に紙パンツ  
 かくれんぼあの子が一人帰らない  
 影踏みをしてとりぼっちで続ける  
 人生に遊び心のある暮らし  
 遊び上手話し上手なおばあちゃん  
 毎日を精一杯にけんけんば  
 ハンドルの遊び程度で世を渡る  
 指切りのまだ追いかける赤い糸  
 子は遊び大人は跨ぐ水たまり  
 ハンドルの遊びぐらいの軽い嘘  
 東尾由子  
 波部珀兎  
 美代  
 秋田あかり  
 美代  
 波部珀兎  
 堀内きみ子  
 松島きよみ  
 山野寿之  
 浜知子  
 直子  
 久世高鷲  
 林ともこ  
 直子  
 船木しげ子  
 真鍋心平太  
 船木しげ子  
 林ともこ

# お題 「橋」短句

互選

1点

揺れる吊り橋動けない足  
 パパの弱点つり橋こわい  
 江戸日本橋高速走る  
 怖い吊橋最も近道

今夜も止まる京橋で足

神さま慣れた天の橋立

橋で迷うか真知子も君も

狼狽えている吊り橋の上

跳ね橋故に心酔したゴッホ

橋のたもとで出会う静けさ

足はガクガク揺れる吊り橋

故郷の橋意外小さい

河童伝説橋から覗く

見下ろす川に蛍を探す

戎橋下孤独の逃場

吊橋渡るような恋でも

虹の橋には七色の愛

吊り橋の上愛の告白

石橋叩き渡る用心

橋が無ければ対岸他国

橋のたもとでもう3時間

わたしのために虹色の橋

2点

三枝なな

浜脇蓬生

蔵内歳重

船木しげ子

井澤壽峰

久世高鷺

井澤壽峰

浜脇蓬生

林ともこ

直子

青空

三枝なな

美代

蔵内歳重

松島きよみ

武智三成

浜知子

林ともこ

小林満寿夫

直子

松谷由夏

青空

3点 二重橋背に父と白黒

4点 橋で泣かれて橋で別れる

名も無い橋であの夜の蛍

出会いと別れくり返す橋

揺れ揺れ揺れる恋の吊り橋

5点 差別に耐えて橋のない川

嫁姑を孫橋渡し

6点 平和の橋は南北繋ぐ

戎橋早やトラキチを待ち

星に逢いたく渡る吊り橋

8点 橋から跳んだワンパクの夏

虹がつかないだ橋のない川

10点 友が還らぬ戦場の橋

12点 今ならきつとあの橋渡る

武智三成

久世高鷺

秋田あかり

信子

東尾由子

山野寿之

堀内きみ子

東尾由子

加山勝久

山野寿之

松谷由夏

船木しげ子

真鍋心平太

秋田あかり

今月の投句者(28名 敬称略 太字は初参加の方です。)

井澤壽峰 加山勝久 蔵内歳重 春田敏晴 松島きよみ

山野寿之 岩原一角 信子 武智三成 小林満寿夫

船木しげ子 三枝なな 林ともこ 美代 真鍋心平太

秋田あかり 久世高鷺 直子 松谷由夏 青空

波部珀兎 浜脇蓬生 堀内きみ子 勘兵衛

佐野正邦 東尾由子 浜知子 蟹座干支羊

皆様ご参加、ご協力ありがとうございます。

川柳天守閣 連載 評論「現代川柳の詩学」を考える ②⑩  
井上剣花坊と民衆詩人ホイットマンにおける民衆藝術論  
十八世川柳宗家 閑成庵川柳 平 川柳（東京川柳会主宰）

一九一八年一月、詩人・福田正夫（一八九三・一九五二）を中心に白鳥省吾（一八九〇・一九七三）らによって詩誌『民衆』が創刊されました。福田正夫は「民衆詩派」の中心的な詩人で「民衆詩人」と呼ばれました。

この他、日本で初めて「口語自由詩」の「塵溜」<sup>はきだめ</sup>を發表した川路柳虹（一八八八・一九五九）、口語自由詩の詩集『太陽の子』（洛陽堂）を一九二四（大正三）年に上梓した福士幸次郎（一八八九・一九四六）らも代表的な「口語自由詩」の詩人たちでした。

「民衆詩派」のこうした詩人たちは口語を用いて〈詩語の世俗化〉を目ざしました。

「新川柳」が「文壇の民衆詩で無ければならぬ」と剣花坊が語る「民衆詩」は大正時代の「民衆詩派」の「口語自由詩」を意味しています。

「二十七 世界唯一の民衆藝術」で剣花坊は「川柳は世界唯一の民衆藝術である」と宣言します。大正時代の文壇において一九一六（大正五）年から数年に渡って「民衆藝術論」が盛んに論じられました。

「民衆藝術論」の論争は「大正デモクラシー」の思潮の中から「藝術の民衆化」という課題が問題となり、一九一六年八月、早稲田大学の本間久雄（一八八六・一九八一）が『早稲田文学』に発表した「民衆藝術の意義及び価値」という論文が発端となっています。この論文で本間久雄は「民衆藝術とは、一般平民のための藝術」であると規定していますが、剣花坊はこの「民衆藝術」を「一般社会の空気と一般民衆の感情とを其藝術の上に表現したもの」と定義しています。

この「民衆藝術」の「創作者」であり、「民衆詩人」の代表者として剣花坊はアメリカの「世界的詩人」であるウォルト・ホイットマン（一八一九・一九九二）をあげました。そしてホイットマンの『草の葉』（*Leaves of Grass*）に収録されている「わが胸に薫る草」（*Scented Herbage of My Breast*）を英語で引用し、次のようにホ

イットマンについて述べています。

「一本の草にさへ我が胸の血の薫りを漂はした米国の世界的詩人ホイットマンの如き、実に立派な民衆詩人であり、民衆藝術の創作者であり、米国社会の空気をもつとも濃厚に呼吸し、米国民衆の感情をもつとも広く体験して、これを其創作に表現したものである、」

剣花坊はこのホイットマンと『古事記伝』の作者として知られる日本の国学者の本居宣長（一七三〇・一八〇一）の「敷島」の和歌を示し、両者を比較して、その相違点を次のように評しています。

敷島しきしまのやまとごころを人間はば

朝日に匂ふ山桜花

「本居のは、貴族的態度を以て民衆の一人たる地位に在ったにも拘かはらず、事物を外面的

に観察して、客観的に歌ひ、ホイットマンの

は、どこまでも民衆的態度を以て事物を内面的に観察して主観的に歌ふ、米国民衆のこころ悉くが、其思想感情を歌つたと同様だとも云へるが、乍併ホイットマンはホイットマンであり、米国民衆は米国民衆である、其間に世界的大詩人と一般米国民衆との差別が有ることは、恰あたかも本居宣長と日本国民との差別があるのと同じである。」

この剣花坊のホイットマンと本居宣長の比較評論には剣花坊の比較文学者的な視点が認められます。

（続く）

# 「ろうそく」

真鍋心平太

私は毎朝晩、お仏壇に手を合わせる。ろうそくに火を灯し、合掌するひとときは、心を鎮め、一日の節目を整えてくれる大切な習慣だ。炎の小さな揺らめきと、線香のほのかな香りが、日常の喧噪から私を切り離し、亡き人への想いと向き合わせてくれる。

ところが近頃、この火を消し忘れることが時おりある。お参りの最中にふと浮かぶ考え事や、心を曇らせる不満、これからの予定に対する焦り。そうした雑念に心を奪われると、最後に火を消すことを忘れてしまうのだ。当座は「今後は気をつけよう」と心に誓うのだが、数日も経てば同じ過ちを繰り返してしまう。気づいたときには、ろうそくがすっかり燃え尽きていることもあり、小さな不注意で済まされることなく、時に危険を伴う。

誰かに相談できればよいが、こうした些細な困りごとを打ち明ける相手は案外見つからない。そんなとき、ふと頭に浮かんだのが、新しくなったと話題の「ChatGPT」への相談だった。半ば試し、半ば本気で状況を説明すると、思いのほか的確で、しかも現実的な提案が返ってきた。

ひとつは「行動をセットにする」という方法だ。お参りの所作の中に、火を消す動作を必ず組み込む。たとえば「火を消す↓合掌↓一礼」という順序を崩さず、体に覚え込ませる。そうすれば、心がどこか別のことを考えていても、手順が自然と体を動かすという。

もうひとつは「LEDろうそく」への切り替えだ。本物の炎ではないが、最近は炎の揺らぎまで再現された製品があり、見た目も雰囲気も損なわないという。火を使わないから安全で、燃え尽きる心配もない。

この二案を聞いて、私はなるほどと思った。人は案外、単純な仕組みや道具によって安全と安心を得られるものだ。そして何より、AIとのやりとりが、このような生活改善のヒントにもなることに驚いた。

世間では、ChatGPTで作られた文章の丸写しや、著作権の扱いを巡って賛否が交わされている。しかし、道具は使えば、AIは時に頼もしい相棒となる。

お仏壇の小さな炎が、思いがけず私の暮らしを照らす新しい光となった。

——巻末にこのイメージを鉛筆で描いてみた。

## 第29回 ウェブ川柳天守閣 ご案内

お題 「蝶々」 春田敏晴 選  
「反応」 東尾由子 選  
「鮮やか」 互 選  
「雑詠」 真鍋心平太 選  
「泣く」(短句) 互 選

(投句 各 2 句)

投句料 3 回につき 1000 円

(請求書メールが届いたらお支払い下さい。)

左記の投句、互選投票、結果発表の閲覧は  
下記 URL から可能です。

<https://tensyukaku.com/>

投句、互選投票は会員登録が必要です。

会員登録は下記 URL より

[https://tensyukaku.com/id\\_make.php](https://tensyukaku.com/id_make.php)

スマホは下記 QR コードから

投句開始 2025年9月9日(火) から

投句締切 2025年9月15日(月) まで

互選投票 投句締切後下記の期間内に投票して下さい。

9月16日(火)～9月19日(金)

披講発表 8月20日(土) から随時閲覧可能になります。



投句・閲覧



会員登録



鉛筆画

クリックで拡大

二〇二五年八月二十五日発行  
ウェブ川柳天守閣会報

(発行責任者 真鍋心平太)

(編集人 真鍋心平太)

(事務所)

〒 520-0054

滋賀県大津市逢坂一丁目8-1

サンルシエル大津607号室

川柳天守閣

Tel・fax 077(532)4211

携帯 080(2672)4446